

大学・学類における教員養成に対する理念

(1) 教員養成に対する理念・構想

①大学

(i) 酪農学園の建学の精神と教員養成の理念

本学は昭和35年（1960年）の建学以来、キリスト教に基づく「神を愛し、人を愛し、土を愛す」の「三愛精神」に基づく人間教育と、健やかな土から産み出される健やかな食物によって健やかな生命が育まれるという「健士健民」の理念による実学教育を柱に、豊かな情操と国際的な視野を持って活躍できる創造的で実践的な人材の育成に取り組んでいる。さらに地球環境と人類が共生しながら物質やエネルギーが循環するシステムを構築・実践する「循環農法」を長年にわたり提唱し実績を上げてきた。

周知の通り、食料を供給する農業は全人類の生存に不可欠な営みであり、それゆえ農業に関わる領域の知識・技能を次代に継承し農業に精通した指導者を養成することは、人類の生存の基盤を支えることに他ならない。本学の創設者である黒澤西蔵はその著『酪農学園の歴史と使命』の中で、「酪農学園は酪農を通して日本はおろか、全人類の福祉向上に貢献し得る人材をはぐくみ育てる使命を持つ本邦唯一の実学修得の教育機関である」と述べ、「酪農学園だけはほんとうの農民をつくり、実際の農業の改革に役立つ研究をする教育機関でなければならない」のであり、「本物の農業をやるには、（中略）技術だけではなくて頭も心もりっぱな農民を育てなければいけない」として、広く世界の発展に貢献する農業実践者を養成することの重要性を強く説いた。すなわち農業にかかわる知識と技能を基盤とした実践的な力量を備えた教員を養成することは、本学にとって極めて重要な使命でもある。

そこで本学では、酪農学部（酪農学科、農業経済学科、食品科学科、食品流通学科）に加え、環境システム学部（地域環境学科、生命環境学科、環境マネジメント学科）の2学部7学科に教職課程を設置し、中学・高校理科、社会科・公民科、商業科の教員を養成し、農業科教員をはじめ、現在では北海道はもとより全国の中学・高校において600名を超える（平成21年時）本学出身の農業、理科、社会科等の教職員が、次の世代の人材育成にあたっている。そして、2011年度に循環農学類、食と健康学類、環境共生学類に再編されて以降、現在も本学の教職教育を通じた農業科、理科、社会科・公民科の教員養成を担っている。

これまでの成果をふまえるとともに、今日的な課題に対応していくために、以下のような理念に基づいて教員を養成する。

- ・専門的な知識と技能に裏打ちされながら現実の課題に対応していくことができる実践的教育者
- ・循環農法を通じた持続可能型社会を支えることのできる実践者・理解者
- ・農や食に関わる生産現場と消費現場とをつなぐことのできる中核的指導者
- ・農業を基盤としながら社会科学・自然科学両分野を俯瞰できる総合的な力量を有した教育者

すなわち、農業科、理科、社会（公民）科の教育実践を通じて、北海道をはじめとする我が国の農業発展に寄与できる実践的な力をもった教員を世に送り出すことが、本学の教員養成の理念の中核をなしている。

(ii) 酪農学園大学が養成したい教員像

また、教員として獲得すべき共通する具体的力量としては、

【教育者としての資質を持ち、責任ある態度、適切な判断力を獲得すること】

教育を司るためには、生徒、保護者、地域住民からの信頼を得ることは極めて重要である。それゆえ、教員としての仕事のみならず、一般教養やマナー、社会教育へ積極的に参加する態度、また、心の悩みを受け止められる包容力など多くの事項に対応できる資質が求められる。また、常に実践の中で判断力を向上させる訓練の場を設けることで、刻々と変化状況の中で適切な判断を下すことが可能となる。

【地域の産業や文化に理解を示し、連携ができること】

学校のある地域は、日本全国の多種多様な環境と文化と産業が存在しており、教員という仕事に就く以上、どのような地域にもとけ込まなくてはならない。特に地域の伝統的な芸能やイベント、産業は、生徒にとっても生活そのものであるから、教員自身が地域の一員として生きていこうとする態度が求められる。

【教育者としての誇りを持ちながら、周囲からの信頼を獲得すること】

一人の人間として、素直さと謙虚さ、正直さを持ち、何よりも教員という仕事に喜びと誇りの持てる教員を養成する。そのためには、学生時代から多くの異世代交流による経験を積み、多くの人とコミュニケーションをとることが必要である。

以上の力を、本学の実践的な農業教育を通じて獲得させることを目指した教職課程カリキュラムを展開する。

a) 農業科

本学における実学教育は、単に実用的な教育ではなく、その時期とその状況に応じた適切な判断や学んだ知識を発揮し応用できる能力を育むものである。地球の自然環境はじめ、農畜産物の生産、食品の開発、流通・経済のあり方、食や健康など社会を構成するあらゆる要素に対し、臨機応変に対応する能力を身につけた農業科教員の養成に努めてきたところである。

農業教育においては、実践の中で生徒を教育することが何よりも大切である。それゆえ、単なる知識による理論や理屈を知っていることより、問題や課題に対して生徒、家庭、地域と連携して直接実践する態度を養成することが必要になる。また、農業教員における専門性のうち、最も必要な資質は動植物を飼育栽培することと農業クラブ活動の推進である。そのためには、学校農場を教育の場として運営する知識と技術を身に付けさせる必要が求められており、特に農業クラブ活動は生徒に「生きる力」を育む活動であるため、実践的に指導を進める教師としての力量の獲得が不可欠である。

今後も引き続き、以上の理念に基づいて進めてきた農業実践者としての力量を備えた農業科教員の養成を目指す。

b) 中学・高校理科

これまで本学では、理科教員の養成は酪農学科、食品科学科、生命環境学科のもとで展開してきた。農学を核として自然科学全体を総合的・応用的に見通せ、実践できる力を持った人材を養成してきたことは、農業・環境系の学部を合わせ持たない大学には真似できない本学の教員養成の特色といえる。

戦後の日本では、理科教育は4科（物理、化学、生物、地学の分化理科、専門理科）の専門教育として発展してきた。この総合理科から分化理科への高度化・専門化傾向は、高度経済成長にともなう高度科学技術者養成時代に著しいものであった。その一方で、今日は高度経済成長時代の理科必修から個性、態度主義を過度に重視した教育への転換に伴う理科基礎学力改善問題（理科離れ、技術離れ対策、総合的理科学力育成）が、技術立国形成を国是とする日本の理科教育の当面の課題となっている。理系各大学におけるこれまでの理科教員養成法は、ともすれば狭い理科各科の領域に閉じこもりがちの傾向があった。

しかしながら、現代の要請である高度な専門知識技能を教育する理科教育ばかりでなく、実践的な農業、環境科学の視点に立ち、応用的理科教育に関心を持つ実践的総合的視野の豊かな理科教員を育成することが求められている。そこで本学では以上の点を踏まえ、農学、環境学と理学との連携を図り、総合的な知識と技能を有した理科教員を養成することで、この国民的課題に応える教職課程教育を展開する。

c) 中学社会科・高校公民科

これまで本学では、農業経済学科、食品流通学科、地域環境学科、環境マネジメント学科の4学科のもと、農業および環境の専門分野に重点を置いて社会科・公民科教員の養成にあたってきた。農業は生産・加工に関わる技術だけではなく、農業政策・制度、市場・流通、消費者動向、人口・労働問題、食糧問題、農業・食文化さらには環境問題、国際関係など、人文・社会科学的に見ても多角的な領域に関わりを持つ分野である。これまで本学では、農業や環境にかかわる問題を俯瞰することができるカリキュラムを展開する中で、政治、経済、国際関係、地政、歴史、文化、倫理などについての幅広い知識を有した社会科・公民科教員を養成してきた。以上の教員養成理念を継承しつつ、今後は循環型農業を唱えてきた本学の農業教育を通じて、人類にとって喫緊の課題でもある持続可能型の社会のあり方について豊かな見識を子ども達に伝えることのできる力量を持った社会科・公民科教員を送り出すことで、本学の特色を生かした教職課程教育を展開する。

②各学類等

(i) 循環農学類における教員養成の理念、構想並びに養成したい教員像

循環農学類について、本学学則には「農業に関する科学を学び、社会における農業の意義を正しく理解し、安全な食料を継続的に供給できる循環農学を実践するための幅広い知識と技術を修得した人材を養成する」と示されており、専門分野として、酪農学コース、畜産学コース、農学コース、農業経済学コースが設置される。

循環農学類では農業に関する総合的な知識・技能の獲得と実践的な農業技術の体得を目指した専門教育を基盤としながら、(a) 農業科、(b) 中学並びに高校理科、(c) 中学社会科並びに高校公民科に関する教職課程を設置し、子ども達に農業が自然界や社会に果たしている幅広い影響力や重要性を伝え理解させることのできる教員を学校現場に輩出して、社会的なニーズに応えることを目指す。

農と食の安心・安全に関わる意義を社会全体に伝えていくためには、学校教育の中で子ども達にその意義と重要性を伝えていくことが重要である。さらに近年は、農業系列以外の学科の生徒に対しても農業科目を選択させる学校が増えており、理科や社会の教員に対しても基礎的・基本的な知識や技能を伝えられる力量が求められている。こうした力量を獲得させるために、本学では学類の専門教育に加えて、教職課程教育プログラムの中で専用の有機農場を活用しながら、有機による栽培の実践のほか、農業高校、農業経営者、民間企業、地域イベント等と多くの連携する機会を設け、体験と経験を積ませる内容を設定する。

また、これら農場フィールドをベースとした教育プログラムを、農業科教員を志望する学生のみならず理科・社会科教員を志望する学生たちに対してもその一部を体験させることで、教員として採用された際に農にかかわる題材を有効に教育実践に活用できる力の獲得を目指す。

(ii) 食と健康学類における教員養成の理念、構想並びに養成したい教員像

食と健康学類について、本学学則には「本学の基本理念である実学教育を通して、食の生産、加工・製造、流通ならびに健康に関する幅広い知識と技術を修得するとともに、食と健康に関する総合的な判断力を培い、社会に貢献できる人材を養成する」と示されており、専門分野として、食品機能科学コース、食品開発学コース、食品流通学コースのほか、管理栄養士コース（教職課程は設けない）が設置される。食と健康学類では、自然科学、社会科学的なアプローチから専門的に学ぶとともに、食品製造・加工実験室を活用した実験・実習を通して実践的な技術力を獲得し、食と健康についての専門家の養成がはかられている。

食と健康学類では、食と健康に関する専門的な知識・技術を獲得し、食品の生産、加工、流通、消費行動にいたるまでの全体を見渡せる力量の獲得を目指した専門教育を基盤としながら (a) 農業科、(b) 中学並びに高校理科、(c) 中学社会科並びに高校公民科に関する教職課程を設置し、子ども達にわれわれの生活や健康に食が与えている影響を伝え理解させることのできる教員を学校現場に送り出すことで、社会的なニーズに応えることを目指す。

(iii) 環境共生学類における教員養成の理念、構想並びに養成したい教員像

環境共生学類について、本学学則には「環境現象を解明、解析し、環境現象の科学的理解の上に環境問題の「診断」を客観的に行うことにより、環境問題解決のための「処方箋」を与えることの出来る基本的素養の修得をめざし、環境をめぐる諸問題を科学的に理解し、環境と調和・共生する社会の形成に貢献できる人材を養成する」と示されており、専門分野として野生動物学コースと生命環境学コースが設置される。

環境共生学類では、野生動物や生命をテーマの中心に据え、座学はもとより実験・実習のほかフィールドでの実習・体験を通して、環境現象にかかわる課題発見・解決するとともに、環境と調和した持続可能な社会の在り方を提示できる力量の獲得を目指す。環境共生学類では、以上の専門教育を基盤としながら、中学・高校理科教員に関する教職課程を設置し、理論的にも実践的にも環境教育を担うことのできる教員を学校現場に送り出し、子ども達に環境保全の重要性を伝え理解させることで、社会的なニーズに応えることを目指す。